

自分の思いを表現しあう音楽学習

～指導内容を明確にし、知覚・感受を深める～

音楽科 小川美紀

1. 主題設定の理由

音楽科では、「知」を学力の基礎・基本と考えられる「知覚・感受したことをもとに、自ら課題を見つけ、創意工夫し、他者と関わりながら音楽で表現する力」と捉え、「自分の思いを表現しあう」ことを大切に、歌唱表現を考える授業づくりをしている。単に歌唱するのではなく、歌詞の内容や、曲想などから、イメージを持ち、心情や情景を考え、他者とどのような表現ができるか、どのようにイメージを伝えるか、工夫し、話し合い、意見交換を繰り返すことで、新たな発見や考えが再構築され、相互理解し合うことができる。そして音楽表現の創意工夫につながって行く。そのためには、指導内容を明確にし、授業の流れに確かな方向性を持たせ、自分の思いを表現しあう場では、互いに相手の音楽表現を聴き、その表現が自分にとってどうであったかを音で確かめながら言葉で伝える場面がある。そこで用いられる言葉は、知覚（判別し意識する）・感受（特質や雰囲気などを受け入れる）したことが基になると考えられる。従って、互いの表現を理解し合う場面では、音や音楽に対する知覚・感受の深まりが不可欠と考える。知覚・感受させるために大切なことは、学習のあらゆる場面で、音や音楽と関わらせ、音や音楽で確かめることである。比較聴取の手法などを用いて両者の違いに気づかせる場面でも必ず、音を聴いて確かめながら知覚・感受したことを言葉で伝え合うように留意している。「自分の思いを表現しあう」ことは互いに同一でない感性や価値観をもって、音や音楽、また言葉でやりとりすることで、様々な違いが焦点化される。そして、それぞれの感性や価値観を理解し、互いの思いを共有していく中で、表現の基となる自分のイメージや気持ち、表現に対する想いが明確になり、自分の中で意図が構成されていくと考える。

2. 実践の概要

今年度は日本伝統音楽である「民謡」で歌唱表現を考えることにした。民謡を歌う第一歩として、日常的にあまり民謡との関わりがないと思われる中学生でもよく耳にする「ソーラン節」を教材とした。民謡が生活から生まれた音楽であるということを理解し、曲の背景にある文化について考え、曲想や声の特徴を知覚・感受しながらその良さを味わって歌唱表現を工夫させたいと考えた。生徒はこれまで、西洋音楽の発声を中心に歌唱活動を行なってきた。また、日本の民謡についても、西洋音楽の発声で歌われた演奏を耳にしたことがあると思われる。そこで、本単元では、「ソーラン節」を、西洋音楽の発声で歌うことと、本来の民謡の発声で歌うことを比べることにより民謡らしさを感じる声の響きを知覚・感受し、声の響きと歌詞に含まれるメッセージの関わりからイメージや感情を喚起させ、民謡の良さを感じながら、自分の思いが伝わるように創意工夫して「ソーラン節」を歌わせたい。

【実践事例】

題材 「ソーラン節」

「指導事項」A「表現」(1) イ 曲種に応じた発声により、言葉の特性を生かして歌うこと。

〔共通事項〕音色

単元の目標

- ・日本の民謡の発声や文化的背景に関心をもち、声や歌い方や言葉の特性を生かして意欲的に歌唱表現に取り組む。
- ・日本の民謡の曲想や発声の特徴を知覚・感受し、表現したい心情やイメージが民謡らしく歌唱表現できるように工夫する。
- ・表現したいイメージが他者に伝わるように民謡の発声で歌唱表現ができる。

評価規準表

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
日本の民謡の発声や文化的背景に関心をもち、声や歌い方や言葉の特性を生かして意欲的に歌唱表現に取り組んでいるか。	日本の民謡の曲想や発声の特徴を知覚・感受し、表現したい心情やイメージが民謡らしく歌唱表現できるように工夫しているか。	表現したいイメージが他者に伝わるように民謡の発声で歌唱表現ができるか。

学習の流れ

民謡らしさを味わわせるためには、最初に西洋音楽的な発声で歌い、次に民謡の発声で歌う。これを比べることにより民謡らしさを感じ、民謡の良さを感じながら、自分の思いが伝わるように創意工夫していく。その手立てとして、次のような段階を追って学習することにした。

① 普段の授業で歌っている西洋音楽的な発声で斉唱する。

西洋音楽の発声で歌った時と、民謡の発声で歌った時の違いを知覚・感受させる。

② 様々な発声があることを知る。民謡の技法について。

歌い方の工夫の手がかりとして、民謡歌手、オペラ歌手、演歌歌手の歌唱表現を聴き、歌い方・発声の比較・違いについて知覚・感受し、様々なことを感じ取り、イメージを膨らませる。また技法についても聴くことで感じとっていく。

<歌い方を比較し感じとったこと>

歌手・曲名	気づいたこと・感じたこと
① 臼澤みさき（民謡歌手） 「アメイジング・グレイス～赤とんぼ」	口が縦に開いていない。地声のようにしっかりとした声。 声のふるえ（ビブラート）がすごい。なめらか
② 佐藤しのぶ（オペラ歌手） 「アメイジング・グレイス」 ジョン健ヌツォ 「赤とんぼ」	声が透きとおっているから教会にいるイメージ ホールいっぱい深く響く。口の開きが縦。腹式呼吸。 1つの音の長さが長い。 奥深く意味がある。歌そのもの。強弱がハッキリしている。
③ 西野カナ（民謡歌手出身） 「会いたくて 会いたくて」	タ行の言葉の前に小さなツが入る。 のどから声を出す。地声。こぶしのように一瞬ふるえる。
④ 石川さゆり（演歌歌手） 「石狩挽歌～ソーラン節」	地声だけど響きがある。腹の底から声が出ている。抑揚がある。口が横にでかい。“ん”に濁りがある。 鼻の下が延びて歌う感じ。

③ 文化的背景を知る。

文化的背景を知るために、NHK ライブラリーの北海道のニシン漁と伊藤多喜雄のソーラン節の解説のDVDを視聴する。生徒はDVDの視聴から、「ソーラン節」が漁の時のかけ声の歌で、大漁か、そうでないのかが、歌声で表されることを感じとる。大漁になると最高の声になり、また、漁の大変さにも気づく。

④ 歌詞の意味の理解。

歌詞から、イメージした場面は荒れる波や、かもめの数、また、漁師の気持ちとして、漁に出かける楽しみやワクワク感、漁師が海に出て、大漁を願って漁をするので、太い声で力強く歌っているところなどをイメージする。歌い方の工夫として、口を横に開けて、きれいさよりも力強さを意識して大きな声で歌う。文化的背景を意識して力強く歌う。歌詞から「ヤーレン ソーラン」のところはすべて力強く歌い、「ヤサ エーエンヤーンサーノ」の、のぼすところはビブラートをつけ、「ニシン・・・」は気合いを入れて、こぶしをつけると良いなど、民謡の技法についても考えていた。

ヤーレン ソーラン ソーラン ソーラン ソーラン ソーラン

にしん来たかど かもめに聞えは

わたしや立つ鳥 波に聞け チョイ

ヤサ エーエンヤーンサーノ ドッコイショ

ハア ドッコイショ ドッコイショ

ヤーレン → 喜びの歌
 ソーラン → 1人ど
 ちょい → 前進する
 ヤサエーエン → まっすぐ
 サー → 嵐
 ノ → 大漁をいふ

いれも
バリエ

北海道の春に「にしん来たか」とかもめに聞いたが、かもめは冬鳥なので知らないから、波に聞けと言っている。

漁師がかもめに「にしん来たか？」と聞くと、かもめは「わたしは立つ鳥だから、波に聞いてと言え。かもめは冬鳥」
 「さあ、にしんを取りに行こう、みらいな声。」

(生徒のワークシートから)

さらに文化的背景に関心を持たせ創意工夫させるために、クラス内で音楽班、調べ学習班、製作班を作り活動させた。

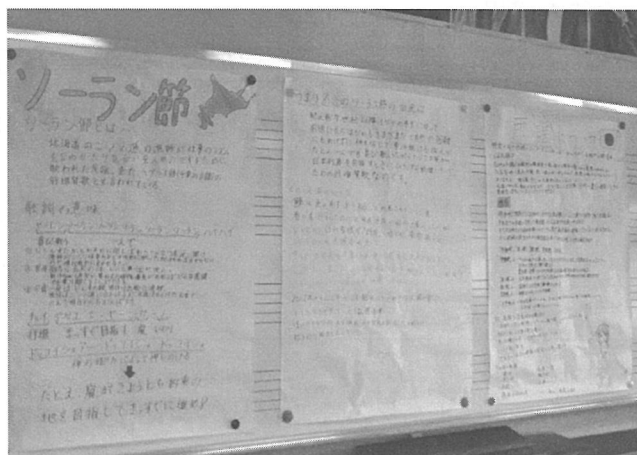
<音楽班>は西洋音楽的な歌い方と民謡の歌い方の違いを考え歌い込む。録音し聴き合う。

<調べ学習班>

「民謡について」や「ソーラン節」について調べ発表し、理解を深め、イメージを膨らませる。



調べ学習班による発表

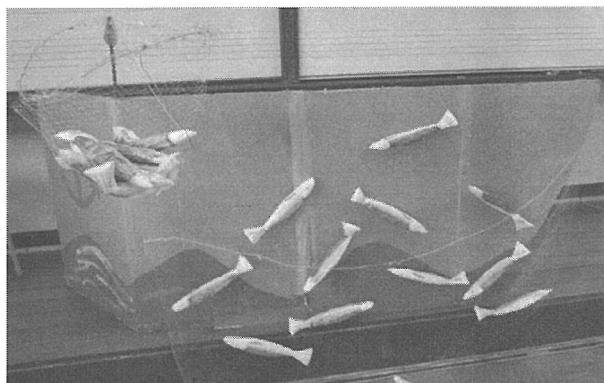


発表したことを模造紙にまとめたもの

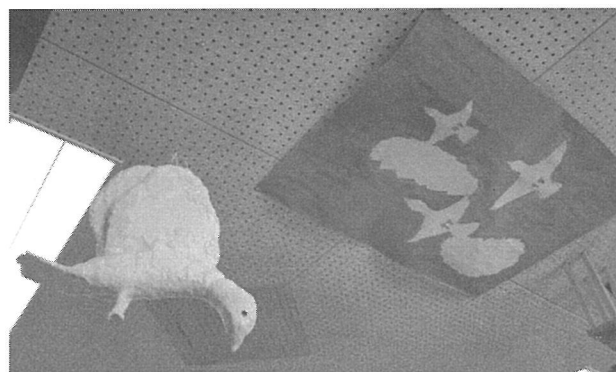
<製作班>

歌詞に出てくるニシンやカモメ、大漁を願う漁師の姿をイメージし大漁旗を製作。

ニシンはニシンそばのニシンのイメージしかなく実際のものを見たことがないので、旬はいつなのか、どれくらいの大きさなのか、など調べてから製作した。いろいろなものを調べ、製作することで、さらに文化的背景に近づくことができ、理解し、「ソーラン節」を知ることができ、歌唱表現の創意工夫につながっていく。



網にかかったニシン



カモメ



大漁旗、製作中



完成した大漁旗

生徒の感想

- ・私は調べ学習班だったので、自分たちで調べる中「聴いたことがあるというだけだった「ソーラン節」の歴史や意味を知ることができたので、とても有意義な授業だと思ったしとても楽しんで学習することができた。
- ・役割を分担することで、民謡について詳しく知ることができたと思う。例えば、調べ学習班が歌詞の意味を調べることによって、理解でき、製作班のカモメやニシンがあったおかげで、その場面をイメージすることができた。

4クラス中、1クラスでこのような製作班や調べ学習班を取り入れた。表現の工夫をするうえでは違いはなかったが、表現の技能としての面では、少し違いが出たのではないかと。実際に自分達で調べたり、製作することにより文化的背景を知り体感し、言葉の特性を生かし、「こぶし」や「しゃくり」、「ビブラート」を取り入れて歌唱表現しやすかったのではないかと。

⑤ 「ピアノ伴奏の西洋音楽的な発声」と「三味線の伴奏で民謡の発声」で歌い比べて二つの発声の違いに気づき、民謡の発声で歌う手掛かりを得る。

<生徒の発言から>

・ピアノ伴奏で歌唱した時
きれいで透明感があり、縦にスパッと切れる。
教会のイメージ。きれいに歌いたい気持ち。

・三味線の伴奏で歌唱した時
芯があり、力強い。声を出したい気持ち。
力を合わせて漁をする様子がイメージできる。



三味線で歌うことにより民謡らしい歌い方や民謡の技法をどのように使うか考えていくようになる。

【民謡の技法】

こぶし しゃくり
ビブラート (ゆらし) 引き その他

このような学習から、文化的背景と関わらせて歌詞の意味を振り返り、グループで表現したい場面を考え、その場面について話し合い、話し合ったイメージが伝わるように歌い方を工夫し練習していく。自分たちがイメージした場面を歌唱表現するために、発声や歌い方について必ず歌って確かめ合い、音と関わらせて考えさせる。

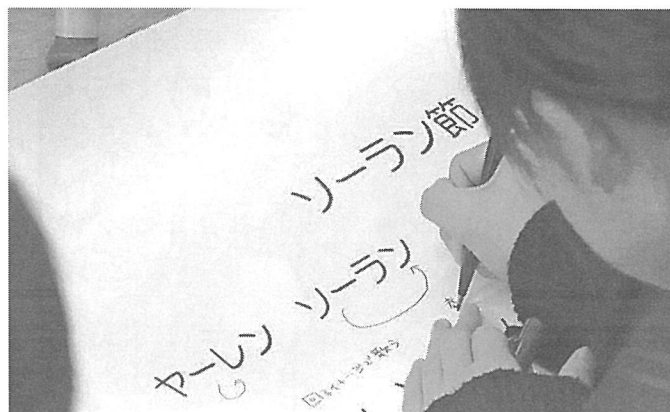
<知覚・感受を深める場面>

生徒はイメージしたことを音で確認しながら表現や歌い方を考えていく。

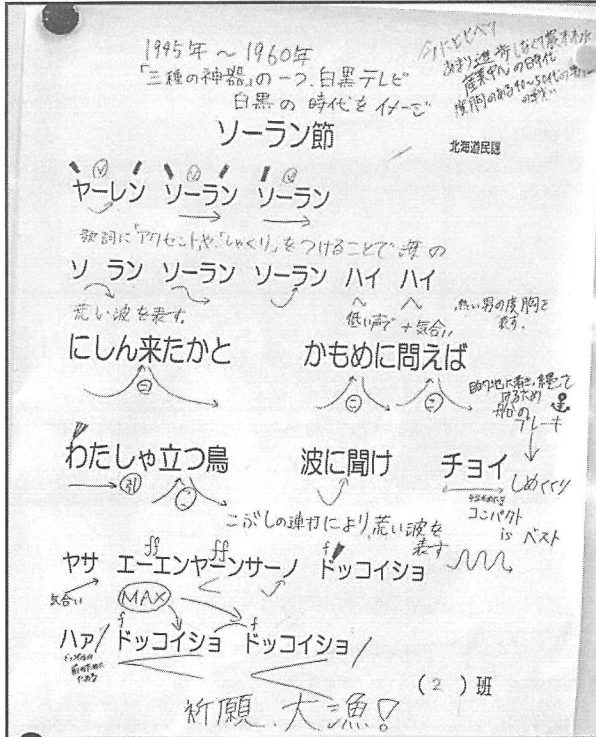


発表時にわかりやすくするために、模造紙を使い赤ペンで「このように歌いたい」、青ペンで「なぜ、そう歌いたいのか」を記入させ視覚からも理解しやすいようにした。そして「こういうイメージで歌いたい」ということを発表させるようにした。

どんな場面か、歌を歌いながら、この作業をするのかを話し合い、どのような雰囲気でするのか(民謡の技法、なぜ「しゃくり」たいのか、「ビブラート」、「こぶし」をするのか) 創意工夫をする。



音で確認し、話し合ったことを書いたもの

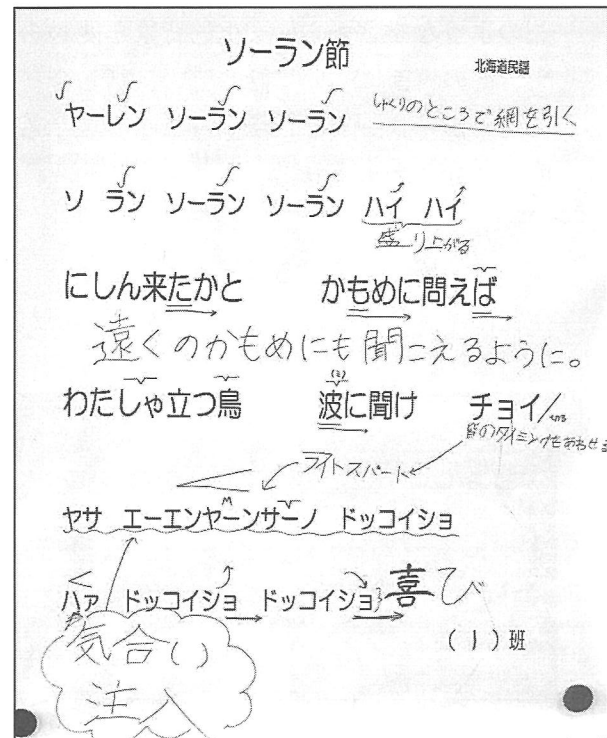


右のグループは漁の様子をイメージし、「ヤーレン ソーラン」で「しゃくり」を使うことで、網を引き、「ハイ ハイ」の「イ」を上げることで、網を揚げる時に思いっきり引っ張る作業をイメージした。「にしん来たかとももめに問えば」と伸ばして歌うのは、遠くにいるかもめに聞けるように伸ばし、「チョイ」で区切るのは網を引っ張って獲るまでのラストスパートで、みんなでタイミングを合わせて、網を引く。そして「ヤサ エーエンヤーンサーノ」からクレッシェンドにしていくのは、大漁の喜びを表すと提案。グループで歌ったあと、皆で歌うことで、より提案したことが深まり、他のグループからはのびのびした感じが伝わり、遠くのかもめに声が届くように力強さを感じるという感想があった。



<自分の思いを表現しあう場面>

左のグループは漁師の人物像として、度胸のある40代～50代の男性をイメージし、歌詞に「アクセント」や「しゃくり」をつけることで、海のはらい波を表現。また、「にしん来たあかと」と「あ」のところで「こぶし」を使っていき、その箇所から「こぶし」を連打することでさらに荒い波が表現でき、そして波も海の波と声の波が重なり、民謡らしさを表現できるということを提案した。これを皆で音で確認しあう場面を作り共有する。他のグループからは提案どおり「民謡らしさ」が伝わるという感想があった。



写真のグループは「ヤーレン ソーラン ソーラン」で船を漕ぐ力強さを表し、「ハイ ハイ」で網を海に投げ入れる様子を動作で表現している。他に動作の表現として「ハイ ハイ」で手拍子を入れ、リズムを合わせることでより気持ちをそろえ、みんなで一緒に漁をするというイメージをしたグループもあった。

大勢で声を合わせ、気合いを入れて歌うために、「ヤーレン」のヤの前に、小さな「イ」を入れて、「イヤーレン」と歌うことや、「にしん」がいるかと、「かもめ」に尋ねるが、「かもめ」が教えてくれなかったという表現を強弱でピアノにし、気持ちが下がるイメージをし、「ドッコイショ」では最後、残っている力をふりしぼり網を引くなど、生徒は様々な創意工夫をし、自分の思いを表現する。



「文化的背景を知り歌ったことについて」の生徒の感想

- ・ 情景を想像しながら歌えたので、感情をこめやすく、「こぶし」などの技法を入れて実際に漁師になった気分が歌えたので、うたいやすくなった。
- ・ 実際のニシン漁を映像で見たことで歌うときにイメージをすることができた。
- ・ 歌詞の意味がわかり、文化的背景を知る前よりも感情をこめて歌うことができるようになった。また、文化的背景で民謡がどんな時に歌われ、どのように作られ、どのように歌われたのかを知ることができ、歌詞の場面や情景をイメージしやすくなった。民謡独特の「こぶし」や「ビブラート」「しゃくり」「引き」などの技法がわかり、より民謡らしい歌い方で、民謡の様子を表現しやすくなった。
- ・ 海の上でニシンを獲っている漁師を想像して歌うことによって漁師になりきって力強く歌うことができた。
- ・ ニシン漁で歌われることや、皆の息を合わせるための歌と知り「ヤーレン」の部分強く歌ってみるなどのイメージができて歌いやすかった。
- ・ 知ることで、「こぶし」や「ビブラート」とかを使い、歌い方が変わった。 声の強弱や技法を工夫できた。
- ・ 漁師がふんばって網を引っ張っている具体的なイメージを持てた。
- ・ どの部分を強くしたら、ニシン漁の場面を連想することができるかがわかりやすくなった。
- ・ リズムよく力をひとつにする気持ちで歌うことができた。
- ・ ニシン漁をする漁師たちを思いながら歌うと自然と力強く歌おうという感じになり「ソーラン節」をいろいろ工夫することができました。
- ・ 「ハア ドッコイ」などかけ声がとても力強く歌おうと思えました。
- ・ みんなで一致団結して大漁を願っていたということから、より班のメンバーで力を合わせて振りつけをしたり、声を合わせたりできた。
- ・ 「ソーラン節」の年代などの経済や文化などを意識することで、ニシン漁の状況や男の人の感情をイメージしやすかった。

全体的な感想

- ・ 班の人と意見を交わすことによって、いろいろな意見が出て、この歌の意味を考えることにより、気持ちを込めて歌うことができた。
- ・ 今まででは全部西洋音楽的な感じできれいに歌うことを考えていたけど、「ソーラン節」に取り組んだことで日本らしく力強く歌うこともできるということを知った。違いがおもしろいな、と思った。
- ・ ピアノと三味線では、どちらが、民謡らしさを表現できるか、歌い比べたときに違いがわかりやすかったし、歌いやすかった。

「ソーラン節」について取り組む前と取り組んでからの「民謡」のイメージで変わったこと

取り組む前	取り組んでから
おじいさん、おばあさんのイメージ 「おじいさんが歌うもの」と思っていた 田舎 伝統的で型が決まっている 古臭い 身近ではない	身近に感じた 「私たちも歌ってもいいもの」と思った 力強い 身近なことを歌っている 歌い方でイメージが変わる 生活に密接している いろいろな種類があることを知った

<成果と課題>

民謡の授業をするにあたって、授業者自身も難しいものと考えていたので、なかなか深くふみこめなかったが、文化的背景を知り、生活から生まれた身近な音楽であると感じることで、入りやすく、歌いやすかったのではないと思う。特に曲の文化的背景を知り、イメージを作ることが一番大切であるということを認識できた。また、創意工夫し歌唱表現するまでに段階を追って学習することで指導内容も明確になりブレずに授業を進めることができ、生徒の理解も深まった。そして、知覚・感受を深めるため、グループでの言語活動の中で音と関わりながら思考し、お互いが納得するまで話し合い、授業者からも何度も発問を繰り返すことで生徒はさらに思考し、イメージを膨らませていく。今までは気づいて感じ、イメージすることまでだったが、さらに広げていくことで生徒は意欲的に歌唱表現に取り組み、目的とする言葉の特性を生かし、自分の気持ちが表現できる歌い方を工夫し民謡らしく歌うことができた。このように取り組むことで、「民謡」の良さを味わわせることができた。

生徒の感想からも「民謡」をピアノ伴奏で西洋的な発声で歌唱することと、三味線の伴奏で民謡の発声で歌唱したことで違いがわかり民謡らしく歌えたことや言語活動を通して友達の意見を聞き、いろいろな意見、考えから、音に変え、自分の思いを表現できたときにはとても達成感があり、ほとんどの生徒が「楽しく歌えた。」と答えた。「民謡」に取り組む前と取り組んだ後では、「民謡」に対する視点が大きく膨らんだのではないか。

今回、生徒に知っている「民謡」を尋ねると、中には、「ぞうさん」や「赤とんぼ」と答える生徒がおり、本当に知らない生徒がいることに驚いた。日本の伝統音楽や自分の生まれた地域の音楽など、やはり学校で教えていく必要があると感じた。小学校とも連携し生活につながっているものを授業で扱っていき、日本の音楽を学び、言葉を大切にし、自分の地域の文化を伝えていける生徒を育成していかなければならない。